

科目名	メディアとパフォーマンス						
英語科目		ナンバリング	(https://syllabus.kyoto-su.ac.jp/syllabus_search/#n)を参照				
開講期	秋学期	開講学部等	文化学部	配当年次	2年次	単位数	2単位
教員名	平澤 剛						

授業概要／Course outline

日本におけるメディアとパフォーマンスの関係を通じて、それらの表現、理論、歴史の変化について検証します。戦後日本において、芸術家たちは絵画や彫刻といった既存の形式を離れ、身体、行為、出来事を表現の中核に据えることで、芸術と日常、政治、社会との境界を問い直してきました。写真や映画、ビデオといった新しいメディアは、単なる記録手段ではなく、パフォーマンスそのものの成立条件として機能し、身体表現の時間性や公共性を拡張します。劇場や美術館、ギャラリーなどの空間における表現に加え、ハプニング、街頭行動なども取りあげ、その表現のあり方を考察していきます。

授業形態、授業方法等／Course form・type

【授業形態】

対面授業

【授業方法】

講義

- ・ICTを活用した授業（形態：遠隔教育（ビデオ・オン・デマンド等））
- オンライン授業はMoodieで行う。内容に関する質問はメールで受けつけます。

授業内容・授業計画／Course description・plan

第1回 イン트로ダクションーメディアとパフォーマンスとは何かー

「メディア」と「パフォーマンス」の基本的な考え方を確認しながら、作品を完成物としてではなく、出来事・行為・関係性として捉える視点を共有する。

第2回 戦後日本の芸術実験とメディア環境

美術家、音楽家、映像作家などが集まった具体美術協会、実験工房を中心に、戦後日本のメディア環境と社会状況を紐解く。

第3回 草月アートセンターという実験

勅使河原宏が設立した草月アートセンターにおける数々の実験を、メディアとパフォーマンスという観点から再検証する。

第4回 舞踏の誕生ー土方巽と大野一雄ー

舞踏の成立背景と思想をたどり、過激な身体表現が写真や映像によってどのように伝達され、イメージ化されたのかを見直す。

第5回 ハプニングー出来事としての芸術ー

ネオ・ダダオルガナイザーズ、ハイレッド・センターの実践を通じて、日常空間や都市を舞台としたハプニングの意味と、それらを記録するメディアの緊張関係を分析する。

第6回 日本におけるフルクサス

NYを拠点とした前衛芸術運動のフルクサスに参加した日本の音楽家や美術家たちの実践を取り上げ、音や行為がどのようにパフォーマンスとして成立していったのかを検討する。

第7回 演劇の前衛化ー状況劇場、天井桟敷ー

1960～70年代のアンダーグラウンド演劇運動を主導した状況劇場、天井桟敷を中心に、限定された舞台空間を飛び出し、街頭やテントにおけるパフォーマンスへと拡張していった実験を振り返る。

第8回 パフォーマンスと政治

学生運動や社会運動と交差する芸術実践を通して、身体的行為がいかに政治的意味を持っていたかを問い直す。

第9回 ヒッピー・ムーブメントと新しい表現

ユースカルチャーやドラッグカルチャーと密接な関係にあった若い作家たちが、ディスコ、ライブハウス、バー、ファッションショーなどで展開した新たなメディアとパフォーマンスの実験を明らかにする。

第10回 女性身体とパフォーマンス表現

日本のパフォーマンスにおける女性の身体表象や実践を取り上げ、男性中心主義的な権力やジェンダーとの関係を考察する。

第11回 万博とテクノロジー

1970年の大阪万博における壮大な実験を対象とし、国家的イベントとしてのメディアとパフォーマンスの可能性と限界を再定義する。

第12回 霧というパフォーマンス

中谷芙二子による霧の彫刻／パフォーマンスを対象に、人工的に生成された霧が、彫刻・環境・出来事の境界を解体するメディアとしてどのように機能してきたのかを捉え直す。

第13回 現代日本のパフォーマンス

ダムタイプなどの事例を通じて、日本という国家的枠組みを超えたグローバルな文脈のなかで、身体・メディア・劇場・観客の関係がどのように再構成されているのかを考える。

第14回：まとめ

★オンデマンド授業：作品鑑賞

※オンデマンド授業の配信時期については授業内およびmoodleで周知します。

※授業内容は一部変更、順番が前後する場合があります。

事前・事後学修／Preparation and assignments

事前学修：授業内容を理解するための準備として、毎回指定する資料の読解や作品の鑑賞などを行い、与えられたテーマに沿ってノートにまとめてください。

事後学修：

授業内容をノートにまとめ直してください。授業で扱ったテーマの理解をさらに深めるための作業をMoodle等で指示することがあるので、その場合はその指示に従ってください。

※各授業に対する事前・事後学修は約180分を目安とし、合計で2,700分程度とします。

授業の到達目標／Expected outcome

- ・メディアアートとは何かが理解できる。
- ・メディアアートをめぐる主要な研究や理論的言説を読み解くことができる。
- ・メディア史を理解できる。
- ・作品鑑賞、分析の技術を身につけることができる。

履修上の注意／Special notes, cautions

- ・配布された資料はよく予習、復習してください。
- ・本授業では、強い光の点滅や大きな音を含む作品を扱う場合があります。事前に注意喚起を行いますが、体調に不安のある方は、無理をせず席を外したり、鑑賞を控えたりして構いません。

評価方法／Evaluation

毎授業時のリアクションペーパー（50パーセント）、学期末のレポート（50パーセント）によって総合的に評価します。

教材／Text and materials

- ・毎授業時にレジュメや参考資料などを配布する予定です。
- ・参考文献は、授業内で随時紹介します。

質問や相談の方法／Instructor contact

- ・授業に関する質問や相談なある場合、上記時間に研究室へ訪問するか（事前にアポイントを取ることが望ましいです）、メールにて連絡してください。メールの件名には、所属学部、氏名、用件を明記してください。
- ・メールアドレス、研究室の場所などは初回の授業で紹介します。